

大学図書館職員長期研修に参加して

工学部建築系図書室 中村 節子

平成11年7月11日から30日までの3週間、長期研修に参加した。以下はその参加までの経緯と感想である。

あれは確か5月の半ばのことだった。とある先輩から私に、研修への参加を勧める電話がかかった。しかし、その時点での私は研修など到底無理と思い込んでいたので、「まず家族のこともあるし、3週間も家を空けるのは無理です。」と思わず答えたが、「そう言わず一度考えてみたら。それだけの価値はあるから。」と言われ、ダメもとで一度相談してみようか、と思ったところから始まった。

それが、「子供も大分大きくなったことだし、何とかやるよ。申し込んでみたら。」との夫の思いがけない返事。これは何かの縁かもしれない、とにかく進めてみようという気になった。職場の人たちにも事情を説明すると幸いこちらもOKをもらうことができた。そして最終的にも参加が認められたというわけである。

ところで、一般的に、子持ちでしかも核家族の女性にとって研修は遠い存在である。こんな悪条件にもかかわらず研修に参加できた私はとてもラッキーだったといえよう。先輩の助言、家族の協力、職場の理解、どれを欠いても研修に参加することはできなかった。

そんなわけで、研修が始まると私は、他の大学からはどんな人たちが来ているのかとても気になった。また、気になると調べずにはられない性格なのでさっそく調査してみたところ、女性の平均年齢が42-3歳、男性は37-8歳で平均5歳の差があることがわかった。そこで、この5歳の差は何だろう、と思った。改めて参加者を見回すと、女性は独身かまたは子供がある程度大きい人が多く、子育て真っ最中の人はほとんどいなかった。一方、男性はそういった家族の条件とは無関係に参加できているよ

うだった。女性にとって家事と育児はまだまだ最優先すべき仕事なんだな、と改めて感じさせられる結果であった。

また、研修に参加してみて、この種の研修はなるべく早く受けた方がよいと思った。なぜなら、文部省の方針や全国の動きなど、小さな部局図書室、専攻図書室に居ては見えない外の流れが一時とはいえ垣間見えるからである。今回の研修でも、電子図書館や情報リテラシー教育など、いくつかの時代のキーワードが繰り返し講義された。こういった外の動きは一見みえにくいかとも実は私たちの日常業務にも大きなところで影響を及ぼすものであり、それを意識するのとしらないのとでは随分違うのではないか、と思った。研修の講師陣は日本の現在の図書館界、図書館行政を代表する豪華な顔ぶれであり、その講義内容は、これからの大学図書館にとっては何が必要かはもちろんのこと、その実現のためには何をポイントに考え、どう行動すべきかにまで及んで、これまで自分では気づかなかった視点を学ぶことができ大変参考になった。また、全国に同業の貴重な仲間ができるというメリットも大きい。

現に、ある大学の人がお世話をしてくれて、研修終了後すぐにメーリングリストが立ち上がり、いま全国レベルで情報交換が盛んに行われている。こんな資料があったら送って欲しいとか、こういう場合はどうするの？との問いかけに全国からすぐに返事が返ってくる。すごいことだと思う。そして何よりも参加者全員がこの仲間意識をつくり出し、守り、発展させようという気になっている。研修マジックとでも呼ばいいのだろうか。参加者全員をその気にさせる「魔法の場所」が長期研修だといえよう。

(なかむら せつこ)